

## 住民主体による「歩く路」整備・維持運動の展開過程と課題 Development process of “Long Trail” movement

馬場淳輝<sup>\*1</sup>・土屋俊幸<sup>\*1</sup>

Junki BABA<sup>\*1</sup> and Toshiyuki TSUCHIYA<sup>\*1</sup>

\* 1 東京農工大学大学院農学研究科

Tokyo Univ. of Agric. and Technol. 3-5-8, Sawai-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8509

**要旨：**近年、レクリエーションとして高まりつつある「歩く」需要の受け皿の1つとして、民間主導での歩道の整備運動が2000年代から盛んになりつつある。これらの運動の効果として、観光振興への寄与や地域住民の誇りの形成等が期待されるが、国内では普及・発展段階にあり、明確な定義もなされていない。そこで、これらの歩道の整備運動を「歩く路」整備・維持運動（以下、運動と略称）と定義し、全体像を把握した。また地域住民が主体となっている北根室ランチウェイ（以下、北根室RWと略称）の事例の展開過程と課題を明らかにした。北根室RWの運動主体は酪農家の代表を中心とする少人数の整備団体である。長期的な取り組みにより、酪農地帯に新たな魅力を生み出したいという代表の想いから団体は設立され、整備は会員の役割分担によって細部まで丁寧に行われた。整備後は対外関係の広がりがみられる。少人数で運営方針を共有しながら継続的に運動が行われてきたと評価できる。土地管理者など団体以外の関係者との連携のあり方、活動資金や代表の後継者など、団体の継続性をどう担保するかが課題と言える。

**キーワード：**「歩く路」整備・維持運動、北根室ランチウェイ、地域住民

**Abstract:** The promotion and maintenance of walkways including Long Trail, Footpath, Kyushu Olle has been developed by mainly private sectors since 2000's. In this paper, it is defined as ‘Long Trail Movement’. We chose Kitanemuro Ranch Way (RW) as a study case and investigated the process of the movement there. The group which put in place Kitanemuro RW was set up by a daily farmer, who became a group leader, and was consisted of a few local residents. The group members shared the management policy of creating a new attractive value for their local area in the long term. The priority for them was to keep the policy through the process of the movement. They divided their roles to promote and maintain Kitanemuro RW. By finishing the maintenance, the relationship between the group and external organizations has increased. Therefore, this study suggested that Kitanemuro RW was a continual movement sharing the management policy by the small group consisted of local residents. However, the continuity of the group will be challenging. This study suggests that collaboration with land managers, funding for maintenance and finding a subsequent leader are important for the future.

**Keywords:** Long Trail Movement, Kitanemuro Ranch Way, local residents

### I 研究の背景および目的

近年、「歩く」という行為に傾向の変化がみられる。かつては信仰や移動の手段等、生活に根付くものであつたが、車社会を経てレクリエーションとしての「歩く」需要が高まってきている。こうした「歩く」需要の受け皿としてロングトレイル等の「歩道」に注目が集まっている（4）。

これらの「歩道」は2000年代から民間主導で盛んになりつつあり、ロングトレイルやフットパス、九州オルレ等、海外での取組を日本型に変容したものがみられる。しかしながら、国内での取組はどれも明確な定義がなされていない。そこで、本研究では「歩くレクリエーションのために道の種類に限らず様々な環境をつないでコ

ース設定された道」を「歩く路」と定義し、「草刈りや道標の設置等のハード面の整備、またマップの作成や各種媒体による情報提供等ソフト面の整備の両方を行い、「歩く路」を維持する取組」を「歩く路」整備・維持運動」と定義する（以下、運動と略称）。

運動について、海外の事例では観光振興に寄与する報告があり、地域経済に効果があることが証明されている（1）。しかしながら、国内においては普及・発展段階にあり、経済的効果はあまり期待できない状況である。そのなかで、盛んになりつつある運動には「歩く路」の非経済的な効用を重視している可能性が考えられる。そこで、本研究では「歩く路」あるいは運動の非経済的な効用に着目する。具体的には、運動を行う過程での地域

住民による地域の魅力の再発見や誇りの形成等が挙げられる（3）。

また、「歩く路」は地域によって設置の理由がそれぞれ異なるとの指摘があり（2），地域ごとに運動の展開過程を把握することは今後の運動の普及のために必要と考えられる。

こうしたことから，本研究では国内の運動を対象とし，その中で地域住民が主体となっている運動に特に着目し，取り組むに至った動機等を含めた展開過程を明らかにすることで，運動における現状とその課題を考察することを目的とする。

## II 研究の課題および手法

本研究の課題として以下の4つを設定した。①「歩く路」整備・維持運動の全体像を把握する。②調査対象を選定し，その概要を把握する。③調査対象における運動の展開過程を把握する。④課題①～③をもとに，調査対象における運動の課題を考察する。

課題①，②は文献資料調査，課題③，④は聞き取り・文献資料調査・参与観察を行った。聞き取り調査は，2013年8～11月に北根室ランチウェイ代表1名，北根室ランチウェイ会員3名，なかしべつ観光協会事務局長1名を対象に行った。また，同期間に中標津町で開催されたロングトレイル・フォーラムへの参与観察も1回実施した。

## III 「歩く路」整備・維持運動の全体像

表一1. 「歩く路」整備・維持運動の全体の概要

Table 1 Outline of “Long Trail” movement

名称	事例数	住民主体事例数	平均距離
ロングトレイル	13	4	114km
九州オルレ	8	0	13km
フットパス	26	16	31km
全体	47	20	53km

資料：インターネット検索中心の文献資料調査より作成。  
注：「ロングトレイル」は日本ロングトレイル協議会に認定されている，または文献・資料によりロングトレイルという名称を用いている「歩く路」，「九州オルレ」は九州観光振興機構により選定されている「歩く路」，「フットパス」は文献・資料によりフットパスという名称を用いている「歩く路」を指す。

運動の全体像の把握はインターネット検索を中心とした文献資料調査より行った。結果は表一1のとおりである。2014年9月現在，全体で47事例あることがわかつた。

り，その中で地域住民が主体となっている事例は20あつた。

## IV 調査対象の選定とその概要

1. 調査対象の選定 課題①で把握した運動の事例から展開過程を詳しく把握する調査対象を選定するため，以下の3つの条件を設定した。①2000年代以降，設定したコースの整備や情報提供等を継続して行っていること。②地域住民（NPOや市民団体等）が主体となっている運動であること。③歩くレクリエーションの機会の提供等，「歩く路」の整備のために設立した団体による運動であること。以上の条件に全てあてはまり，2006年より酪農家を中心とする整備団体により，継続的な運動が行われている北海道中標津町の北根室ランチウェイ（5）を調査対象に選定した。

2. 北根室ランチウェイの概要 北根室ランチウェイ（以下，北根室RWと略称）が整備されている中標津町は北海道東部に位置しており，主産業が酪農業の町である。中標津空港が市街地近くにあり，道東地域の交通の拠点となっている。北根室RWは全長71.4kmからなるロングトレイルで，主要なポイントごとに6つのステージに分かれている（北根室RWでは「コース」のことを「ステージ」と呼称）。酪農地帯と山岳地帯の両方を歩けることが最大の特徴となっている。2006年に酪農家S氏によって整備団体「北根室ランチウェイ」（以下，「歩く路」自体を指す北根室RWと区別するため，整備団体と略称）が設立され，「歩く路」の整備が行われてきた。

## V 北根室RWにおける運動の展開過程①（黎明期）

北根室RWにおける運動の展開過程について，2006年に任意団体が設立されるまでを黎明期，任意団体設立からステージの全面開通までを整備期，ステージの全面開通から現在に至るまでを展開期と大きく3つに分けて把握を進めた。

1. 「歩く路」整備に至るS氏の動機 整備団体代表S氏は中標津町出身の酪農家であるが，整備団体を設立する以前から酪農業以外の活動を積極的に行ってきた。そして，それらの活動の根本には酪農地帯に新たな魅力を生み出したいという想いがあった。

1980年代から都市農村交流に関わり，1988年からは牛乳の消費拡大を模索するなかで牧場レストラン経営と乳製品加工事業を始める。しかしながら，加工品の売り上げは伸びず，乳製品加工事業はやむなく短期で中止となってしまう。その失敗の反省から，取組を一過性のものとして終わらせたくない意識を強くし，「違う角度から考えた方が，もしかして将来いい方向に，長期的なもの，普遍的なものをつくれるのでは」と考えたS氏

は、敷地内の芸術支援活動を2000年代から始める。そして、北海道でフットパスの取組が盛んになりつつあったことを知り、また偶然にも同時期に「歩く路」整備の構想を抱いていた、後に会員となるI氏と話し合ったことで、自ら「歩く路」を整備することを決意する。こうして、2006年に整備団体「北根室ランチウェイ」を設立した。

**2. 整備団体の設立** S氏は周囲の知り合いに協力を呼びかけ、2006年に整備団体を設立する。設立時のメンバーには、Iターンで弟子屈町に住む、出版社経営I氏、中標津町役場職員K氏、中標津町教育委員会学芸員Y氏、中標津町工芸会社経営H氏が含まれる。少人数での設立となったが、その理由としては、長期的な取組により道東地域に新たな魅力を生み出すという運営方針を全員が理解し、共有できることを重視したためである。

表-2. 整備団体設立時のメンバーの概要

Table 2 Outline of the maintenance group at the beginning

名前	年齢	職業	代表S氏との関係
代表S氏	63歳	酪農家	
I氏	63歳	出版社経営	S氏の農場を取材して以来、数年の知り合い。
K氏	54歳	中標津町経済部 経済振興課長	1988年に牧場レストラン経営の相談を受けて以来の知り合い。
Y氏	46歳	中標津町教育 委員会学芸係長	整備団体設立時にK氏をとおして知り合う。
H氏	60歳	工芸会社経営	旧来の友人。

資料：聞き取り調査より作成。

## VI 北根室RWにおける運動の展開過程②（整備期）

北根室RWの整備に関しては基本的に以下の手順で行われた。つまり、候補地の下見、土地所有の確認、土地使用許可の手続き、草刈り、道標の設置等、ハード面の整備、ステージ開設後のマップの作成、モニターツアーの実施である。これらの整備は6つあるステージごとに行われ、代表S氏を中心に、それぞれの会員の得意分野を生かし、役割分担をして進められた。2011年にステージの全てが整備され、全面開通した。

**1. 候補地の下見** 学芸員Y氏が普段の仕事で踏査の経験があったため、GPSを用いて候補地の下見を行い、記録を図面に落とすという作業を担った。また、S氏は下見の段階で土地使用許可の交渉がしやすい顔馴染みの酪農家の牧場内や草刈り等の維持が行いやすい防風林内等の箇所となるべく多く通るように考慮した。

### 2. 土地所有の確認、使用許可の手続き 候補地の下

見の後に土地所有の確認、使用許可の手続きが行われた。土地使用許可の手続きについて、土地の種類、土地管理者に応じて会員の役割分担によって行われた（図-1）。

酪農家が土地所有者である牧場等の私有地に関しては、同じ酪農家としてS氏が担当し、書面とともに直接交渉にあたり、許可を取った。S氏自身が同じ酪農家であることから、マップに牧場通行時の注意事項を細かく記載する等、酪農家へかなり配慮していることがわかる。

中標津町が土地管理者である防風林等の町有地に関しては、担当する部署の事情に詳しいK氏とY氏が対応して、円滑に手続きを行った。

中標津町内に位置する国有林は林野庁根釧東部森林管理署の所管となっており、使用許可はS氏とK氏が担当して、年間の許可使用料を支払う形で手続きを行った。

JA中標津、JA計根別が土地管理者である共同牧場についてもS氏とK氏が使用許可の手続きにあたり、一部冬季のみに通行するという条件付きで許可を取った。

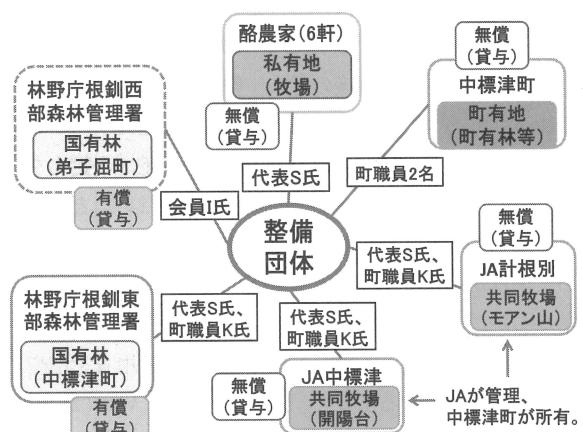


図-1. 土地の種類ごとの使用許可手続き

Fig.1 Procedure of permission to use land

**3. 草刈り、道標の設置** 草刈り作業に関しては、S氏とI氏が中心となって進められ、ステージの開通後も年に2回程度行われている。道標の材料調達、製作等に関しては、工芸会社経営H氏がS氏の意向を聞きながら、中心的役割を果たした。S氏は「多くの人に長く愛されるロングトレイルになってもらいたい。そのため芸術の感性は大切。」と語っており、道標の製作に関して細部までデザインにこだわりがあったことが伺える。

**4. マップの作成、モニターツアーの実施** マップは出版社経営I氏が担当で作製した。道標と同様にS氏の意向を踏まえながらレイアウト等にこだわり作成された。モニターツアーは会員全員で運営され、各ステージの開通後の記念や全面開通後に数回実施された。これま

でに合計で468名が参加し、計8回実施された。

5. 活動資金 2006年から北海道の「地域政策総合補助金」に申請して助成を受けている。これは2010年度に「地域づくり総合交付金」(6)という名称に変わり、継続して受けているが、活動資金としてはS氏の個人資金も少なからず費やされてきた。

## VII 北根室RWにおける運動の展開過程③(展開期)

1. 整備後の対外関係の広がり 北根室RWが全面開通した後、マップの更新やホームページ作成等、ソフト面の整備が充実した。また、2012年に日本ロングトレイル協議会に加盟し、2013年には中標津町でフォーラムを主催する等、全国のロングトレイル関係者と情報交換等の交流を行うようになった。さらに2013年度には、観光庁実施の「官民協働した魅力ある観光地の再建・強化事業」の対象に中標津町の「ロングトレイルを活用した観光プラットフォーム創出事業」が選定され、整備団体は中標津町、なかしべつ観光協会とともに事業の協議会の構成メンバーとなった。始まったばかりの事業で、関係者との関わりはまだ薄いが、道東地域の観光における北根室RWの位置づけが大きくなりつつあると言える。

2. 運営に関する今後の意向 整備後、メディアに取り上げられるようになったことで、増えた遠方からの利用者の好意的な反応から、会員たちは酪農地域の魅力を再確認した。S氏は「牧場を歩けるのは楽しい、といった声を聞いたりして、自分たちのやってきたことは間違っていたなかったと思った」と語る。そのうえで、「何年かかるかはわからないが、歩く文化を根付かせて、新たな魅力にしたい。」と言い、また「急激に利用者を増やしていくくなるよりも、少しずつ増えていけばいい」というK氏の声から、設立当時の運営方針を継続させていきたい意向が伺える。

## VIII 調査対象における運動の評価

北根室RWでは酪農家S氏を中心とする整備団体によって整備が行われてきたが、S氏は整備団体の設立以前から酪農業以外の活動にも積極的で、酪農地帯に新たな魅力を生み出したいという考えをずっと抱いてきた。乳製品加工事業失敗の反省から、活動の継続性を重視するようになり、それは北根室RWの運営方針として少人数の会員間で共有された。整備はS氏を中心としながら会員の得意分野を活かして進められ、2011年にステージが全面開通した。会員は運動をとおして、酪農地域の魅力を再確認しており、全面開通後は対外関係に広がりがみられるようになってきているなかでも、設立当時の運営方針を継続しながら今後も運営していきたい意向を持っている。

以上より、北根室RWにおける運動について、長期的な取組によって道東地域に新たな魅力を創出するという運営方針を大切にしながら運動を続けられている事例であると評価できる。継続的な運動が行えている要因として以下の3点が考えられる。

- ①中心的な役割を果たしてきた代表S氏の考え方を理解する少人数の会員間で運営方針を共有できたこと。
- ②S氏が酪農家で酪農家からの協力を得やすかったことや、町役場職員の会員が行政上のノウハウを活かしたことにより、土地使用許可の手続きを円滑に進められたこと。
- ③運動をとおして利用者の声から、酪農地帯の魅力を再確認できたこと。

## IX 調査対象における運動の課題

一方、課題としては、まず整備団体の継続性が挙げられる。具体的にはこれまで中心的な役割を果たしてきたS氏の後継問題や、活動資金の捻出をどうするか等が挙げられる。また、会員以外の関係者との連携も挙げられる。整備団体が北根室RWのステージ上の土地所有権を持っているわけではないため、土地管理者の協力なくしては北根室RWの運営は成り立たない。また、観光事業に選定されたことにより、対外関係に広がりがみられるようになっており、今後ますます広がってゆくことが予想される。そのため、今後は会員以外の関係者とより連携し、北根室RWが大切にしている経営方針を理解してもらう必要があると考えられる。

## 引用文献

- (1) イングランド自然保護庁“Monitor of Engagement with the Natural Environment 2012 Survey”. <http://www.naturalengland.gov.uk/ourwork/evidence/mene.aspx> (2014年10月20日取得)
- (2) 北海道庁「地域づくり総合交付金」. <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/ckk/sogokouhukin.html> (2014年10月20日取得)
- (3) 神谷由紀子 (2010) 資源がない!?資金がない!?人材がない!? どんな地域でもできるフットパスによる観光まちづくり-多摩丘陵フットパスの場合. 観光文化34:7-11
- (4) 神田修二 (2013) 長距離自然歩道を考えるーのちと心をつなぐしなやかな国土軸への期待ー. 国立公園717: 14-17
- (5) 北根室ランチウェイ「歩き方」. <http://www.kiraway.net/05howtowalk.html> (2014年10月20日取得)
- (6) 小川巖 (2010) 地域を元気にする歩く道—フットパス. 観光文化34:12-16